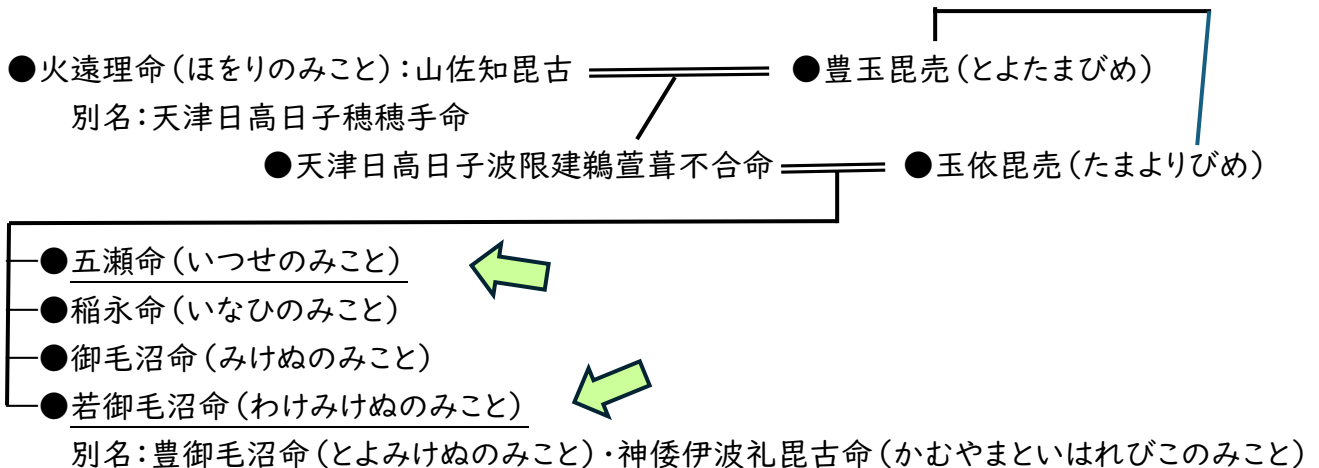


古事記から学ぶ その11
次の時代が動き始めた

「山の神」である大山津見神と天照大御神の流れから発生した「邇邇芸命と木之花佐久夜毘売」が
生み出したのが「海佐知毘古と山佐知毘古」。

この山佐知毘古とその御子が、「海の神」である大綿津見神の娘二人（豊玉毘売と玉依毘売）と結ば
れて四柱の神が生まれた所までで「古事記 上巻」は終わり、ここから「古事記 中巻」が始まる。



<1> 新しい国を求めて東へ向かう

●神倭伊波礼毘古命 (かむやまといはれびこのみこと) は、兄の●五瀬命 (いつせのみこと) とともに、日向 (ひむか) の高千穂の宮に居て國を治めていた。二人はある日、こんなことを相談した。

「天下を安らかに治めるには、どこに居たらいいか。この地では端っこすぎるように思う」

そして、二人は筑紫國に向かって動き出した。

途中で豊國 (とよのくに: のちの豊前・豊後) の宇沙 (現在の宇佐) に到着した時、この地に住む

●宇沙都比古 (うさつひこ)・●宇沙都比売 (うさつひめ) の兄妹が、宇沙川の川端に造った足一騰宮 (あしひとつあがりのみや) でご馳走を振舞ってもてなした。

その後、筑紫の岡田の宮に一年ほど滞在し、阿岐國 (今の広島) の多祁理 (たけり) の宮に七年ほど、さらに東進して吉備の高島の宮に八年ほどいた。

そこから船に乗って進むと、速吸門 (はやすいのと) で、亀の甲に乗って釣りをしながら進んでくる人と出会った。名を問うと、「●宇豆毘古 (うずびこ)」と言う。航路に詳しいと言うので、家来として使うことになり、●槁根津日子 (さをねつひこ) という名を与えた。この名は大和の国造などの祖先にあたる。一行を乗せた船は、波速の渡 (なみはやのわたり) を過ぎて、白肩 (しらかた) の港に停泊した。

この時、登美の地に住む●那賀須泥毘古 (ながすねびこ) が、軍を率いて攻撃してきた。那賀須泥毘古は、長い脛の男で、またの名を登美毘古 (とみびこ) と言う。

船の中に用意してあった楯 (たて) を持ち出して応戦した。このことにより、この地は楯津 (たてづ)、日下の蓼津 (くさかのたてづ) というようになった。

那賀須泥毘古 (ながすねびこ) が放った矢が、兄の五瀬命 (いつせのみこと) の手に突き刺さり、深手を負ってしまった。五瀬命は経緯を振り返ってこう言った。

「私は日の神の御子、敵を太陽の方角に置いて戦ったので、那賀須泥毘古に撃たれてしまった。これ

からは太陽を背にして戦うことにする。」誓いを立てて迂回し、血沼海(ちぬのうみ:のちの和泉灘)に進んでから傷を受けた手を洗った。このことから血沼海と言うようになった。
そしてさらに迂回して紀國の男之水門(おのみなど)まで行った所で、雄叫びを上げて、息絶えた。
この雄叫びゆえに、この地を男之水門(おのみなど)と言うようになった。
五瀬命の墓は紀國の竈山(かまやま)にある。現在の和歌山市和田にある竈山神社である。紀三井寺駅から北東に入った所にある。

<2> 閑話休題(二人が辿った道)

*宇沙の足一騰宮(あしひとつあがりのみや)

現在の大分県宇佐市。川端に造ったという「足一騰宮」は、現在の妻垣神社と言われている。

「足一騰宮」は、支柱の半分は水の中に入っていて、半分が陸地にある造りを意味する。

妻垣神社は、宇佐市の南方にある安心院(あじむ)町にある。神社の傍に流れている川は、津房川と深見川で、二つの川の合流点に広がる平地の南端の山際に神社がある。

残念ながら、宇沙川という川はどこだかわからなかった。

*筑紫の岡田の宮:一年滞在した

北九州市八幡西区の筑前黒崎岡田宮(おかだぐう)。JR黒崎駅の南側にある。主祭神は、神倭伊波礼毘古命(かむやまといはれびこのみこと)となっている。

この地方は、岡(おか)と呼ばれていて、熊族(熊襲)が治めていた。「岡(おか)」が転じてのちに遠賀(おんが)と言われるようになったとする説が有力らしい。

*阿岐國の多祁理(たけり)の宮:七年ほど滞在した

広島県安芸郡府中町の多家神社。広島県の東にある府中町にある。行宮(あんぐう:仮の宮)として造り、七年ほど滞在した。

中世の武家の抗争の時代に衰弱し、江戸時代・明治時代に後継社として改めて創祀された。

*吉備の高島の宮:八年ほど滞在した

岡山県の児島湾に浮かぶ高島という島に建つ高嶋神社と言われている。ここは、現在は百間川と旭川の河口になっているが、昔は広い児島湾の中に浮かぶ小島だったと考えられる。

しかし、岡山県には「高島の宮はここだった」とする神社が四つほどあるらしいので、どれが真説かははっきりしないようである。

*速吸門(はやすいのと)

現在の明石海峡(明石と淡路島の間)。潮の流れが速いことを想像できる呼称である。

*波速の渡(なみはやのわたり)

紀元前6000年~5000年頃には、大阪湾は、高槻・東大阪あたりまで入り組んでいた。〈河内湾〉

弥生時代から古墳時代にかけては、海岸線に砂洲が伸びて「潟湖」になっていた。(河内湖)

潟湖の一番奥(東側)には、生駒山がそびえていた。

*白肩(しらかた)の港

現在の枚方と言われている。この時代には、ここまで船で入ってくる事ができたということである。

*登美(とみ)

奈良市の北西部に登美ヶ丘という町があり、ここが登美毘古の拠点だったと考えられる。

*楯津(たてづ)・日下の蓼津(たてつ)

現在の「東大阪市の日下(くさか)町」と考えられている。

<3> 紀國から熊野へ

兄、五瀬命を失った神倭伊波礼毘古命は軍を率いてさらに進み、一行は熊野の村に着いた。

すると、熊野の山に住む巨大な熊が現れて、その毒氣にあたって一行は気を失ってしまった。

そこへ熊野の●高倉下(たかくらじ)という者が現れて、寝ている神倭伊波礼毘古命の所に一振りの剣を献上した。この霊剣の功德により、神倭伊波礼毘古命は正氣に戻ることができた。

そして、その霊剣を振るうまでもなく、巨大な熊(神)は切り倒されてしまい、兵たちも皆正氣に戻った。神倭伊波礼毘古命が高倉下に「霊剣の由来」を尋ねると、こう答えが返ってきた。

「夢の中に天照大御神と高木の神(高御産巢日神:たかみむすびのかみ)が、建御雷之男神(たけみかづちのかみ)を呼んで、『葦原中國は騒々しく乱れている。お前が行って治めてくるとよい』と命じられました。『私が降りて行くまでもなく、これまでに平定の役目を果たしてきた剣があるので、これを私の代わりに降ろしましょう』とお答えに」なりました。」

この剣の名前は、●佐士布都神(さしふつのかみ)、別名を甕布都神(みかふつのかみ)・布都御魂(ふつみたま)と言い、石上(いそのかみ)の神宮にある。

「この剣を降ろす方法は、高倉下が住む倉の棟に穴をあけて、そこから入れて落としましょう」

「朝になると、夢のお告げどおりに、剣が届いておりましたので、お届けに参った次第です。」

さらに、神倭伊波礼毘古命の夢の中に高木の神が現れて、教示を受けた。

「ここから奥の方には荒々しい神が沢山いるので、あまり深入りしない方がよい。今、天から●八咫鳥(やたがらす)を届けるから、これを道案内として先へ進め」

<4> 熊野から吉野へ

夢のお告げに従って八咫鳥の道案内で先へ進むと、吉野河の上流に辿り着いた。

すると、竹を編んだ漁具で魚を獲っている者がいたので尋ねると、「私は国神(くにつかみ)の●贄持之子(にえもつのこ)です」と答えが返ってきた。阿陀の鶺鴒の部(べ)の祖先である。

さらに進むと、尻尾のある人間が泉の中から現れた。「私は国神の●氷鹿(ひか)です。」と言う。これは吉野の首(おびと)などの祖先である。

山の中に踏み入ったら、また尻尾のある人間が、大きな岩を押し分けて現れた。「私は国神の●石押分之子(いわおしわくのこ)です。お出でになるとお聞きしたので、お迎えに上がりました。」と言う。吉野の國巢(くす:原住民)の祖先である。

道もない深山を進み、時には道を削って先へ進むと宇陀(うだ)の里に到達した。

宇陀は奈良県東部の山地で、室生寺などがある。市役所がある榛原駅近くには八咫鳥神社もある。

宇陀の地には、●兄宇迦斯(えうかし)と●弟宇迦斯(おとうかし)の兄弟がいた。八咫鳥が先導で入り兄弟に、「天神(あまつかみ)がここにお出ました、お前たちはお仕えするか」と、問いかけた。

兄の宇迦斯(えうかし)は、鏑矢を放って八咫鳥を追い返してしまった。そして、神倭伊波礼毘古命の軍隊を迎え撃とうと思って、味方の軍隊を駆り集めようとしたが、味方に付くものは誰もいない。

仕方なく、「お仕えます」と、嘘をついて、大きな御殿を造ってその中に罾を仕掛けて神倭伊波礼毘古命が来るのを待った。ところが、弟の宇迦斯(おとうかし)は先廻りをして、神倭伊波礼毘古命の所へ行き、兄の策略をすべて喋ってしまった。

兄宇迦斯(えうかし)の策略がわかったことから、●道臣命(みちのおみのみこと)・●大久米命(おおくめのみこと)の二人が、兄を呼び寄せて「貴様が先に御殿に入って見ろ」と言って中に入らせた。

進退窮まった兄は、自分が仕組んだ罾にかかって命を落とした。

そして、その死骸を引き出して切り刻んだ。このことから、この地を宇陀の血原（うだのちはら）と言うようになった。

弟宇迦斯（おとうかし）は、神倭伊波礼毘古命を御馳走でもてなしたが、御子は自ら食することなく、部下である兵たちにふるまい、盛大な祝宴を催した。

神倭伊波礼毘古命の一行はさらに旅を続けて、忍坂（おさか）の大室に到着した。

現代の地図で確認すると、奈良県桜井市大字忍阪（おさか）で、桜井から近鉄大阪線で一駅東にある大和朝倉駅が最寄り駅になり、長谷寺の西側になる。

忍坂には●土雲（つちぐも）と呼ばれる原住民の一族がいた。80人に及ぶ勇猛な賊たちが、穴の中に住んで、唸り声を上げながら待ち構えていた。神倭伊波礼毘古命の指揮により、策略が進められた。一行は土雲を御馳走でもてなすことにした。80人の土雲たちに、80人の膳部の係を配置して、御子が歌う歌を合図に一斉に切りかかり、一人残らず殺してしまった。

<5> 兄の仇討ちとその結果

その後、神倭伊波礼毘古命は、登美毘古（とみびこ）すなわち那賀須泥毘古に撃たれて命を落とした兄、五瀬命の仇討ちをすることになった。

登美毘古（とみびこ）への復讐が済むと、●兄師木（えしき）・●弟師木（おとしき）の兄弟の賊を攻めたのだが、戦いが長引いたせいで兵たちは疲れ切ってしまった。歌を歌って、天に助けを求めた結果、●邇芸速日命（にぎはやびのみこと）が降りてきて助っ人として加わった。

邇芸速日命（にぎはやびのみこと）は、登美毘古（とみびこ）の妹である●登美夜毘売（とみやびめ）を妻として、●宇摩志麻遲命（うましまちのみこと）を生んだ。

神倭伊波礼毘古命の腹心の部下となった邇芸速日命（にぎはやびのみこと）は、神倭伊波礼毘古命の兄の仇の妹を娶るといふ、皮肉な結末となった。その子である宇摩志麻遲命（うましまちのみこと）は、物部の連、穂積の臣、媛の臣（うねべのおみ）の祖先となった。

かくのごとく、神倭伊波礼毘古命は各地を転戦して、神々を従わせ、敵対する者は撃退して、畝火（うねび）の白檮原（かしはら）に宮殿を造り天下を治めた。現代の地図で示すと、「奈良県橿原市畝傍町」あたりになる。橿原神宮がある所である。

<6> 余談ではあるが・・・

「現代語訳古事記」の中巻の始まりで、「神倭伊波礼毘古命（のちに神武天皇となる人）は・・・」という書き出しで、神倭伊波礼毘古命が神武天皇になることをほのめかして、「神武天皇の東征」を強く印象付けるように書かれている。しかし、古事記原文を見ると、そのような記述は見当たらない。訳者が読者の理解を助けるために書いたものと思われる。

古事記原文を探ったら、こんな書き方になっていた。

神倭伊波禮毘古命自伊下五字以音與其伊呂兄五瀬命伊呂二字以音二柱、坐高千穗宮而議云「坐何地者、平聞看天下之政。猶思東行。

以上

*参照文献：古事記原文 https://www.seisaku.bz/kojiki_index.html